

図書だより

〈第14号〉

昭和61年3月31日

呉工業高等専門学校

図書委員会



目 次

〔読書感想文〕

「ビルマの豎琴」 (竹山道雄)	1 M	山口 紀昭.....	2
「銀河鉄道の夜」 (宮沢賢治)	1 E	平本 朗子.....	2
「大工道具の歴史」 (村松貞次郎)	1 A	甲斐 幹夫.....	3
「どくとるマンボウ航海記」 (北杜夫)	2 M	井深 圭介.....	4
「塩狩峠」 (三浦綾子)	2 E	若林 整.....	4
「路傍の石」 (山本有三)	2 C	横山 修.....	5
「野火」 (大岡昇平)	2 A	曾根 千栄.....	6
「ソクラテースの弁明」 (プラトーン)	2 E	東野 幸成.....	7
「ソクラテースの弁明／クリトーン」(プラトーン)	2 A	山根 千弥.....	9
「ビルマの豎琴」 (竹山道雄)	3 C	家頭 真一.....	10
「ある微笑」 (サガン)	3 A	寺内美枝子.....	11
「異邦人」 (カミュ)	4 C	本田 久直.....	12

〔随想〕

読書で考えさせられた事 (万引と哲学?)	5 E	小島 康義.....	13
図書の並び方 (利用案内シリーズ1)			14

〔随想〕

東洋人の日本人と「地球の歩き方—ヨーロッパ」	建築学科	福原 安洋.....	15
バーゲンセール雑感	機械工学科	岡部 卓治.....	16
T型人間の形成	電気工学科	鈴木 信也.....	17
新着図書案内			18
編集後記			24

『ビルマの豎琴』

(竹山 道雄)

1 M 山 口 紀 昭

この物語は、映画やテレビでいろいろやっていたものですが、本を読んでいると心が打たれました。

簡単なあらすじはまず、とつても歌や音楽の好きな日本の兵隊がいたところから始まりました。そしてその中に水島上等兵といういつも豎琴をひいているという人がいた。この兵は結局、降伏したわけですが、三角山の方に降伏をしない日本兵がいて、水島にその兵の降伏を勧めるようにたのんだのでした。そして、それっきり戻らない水島上等兵はビルマ僧になっていたという話。

まず不思議なことは、なぜ戦争という、何の利益もない野蛮なことをしたのだろう。もし戦争なんて起こっていなかったら、この本に書いてあるような、無惨な死に方はしなかったはずなのに。それも、何の身よりもなほとかれた死に方なんて…。

でもこの日本兵、とつてもおもしろいと思う。戦争中だということにいろんな歌を歌っていたなんて…。合唱もいいが、あの水島の豎琴、それらは本で読んでいる時、本当に聞こえてきそうだった。

それと、この日本兵には、合唱でその場をのがれようとした時、無気力でこれを聞きいっているイギリス兵をゆるし、そればかりでなく降伏までするというやさしさもある。攻撃するチャンスももちろんあったであろう。しかしやっぱり人間だ。人間であるから無気力である者を撃てない。これには隊長以下、みんなのやさしさを感じる事ができた。

この水島上等兵だけど、ビルマ僧になって、捕虜になったみんなに会った時、とつても心が痛んだと思った。何ととっても、いままで共に生き、共にすごした戦友たちと別れなければならぬのだから。心の中では、このままみんなの所へ戻って、いっしょに泣きたいという気持ちもあったと思う。だけど誰からの身よりもなほ、無惨に捨てられた死体をほうっておくことが出来なかったというのだから。日本兵の死体をイギリス兵が葬って、兵隊の傷だってイギリス兵が治療していたというのに、水島はそれをそっちのけで兵に戻

ろうとした…。だからその人たちを、自分がビルマ僧となって葬ってやるしかないと思ったのだろう。僕はとつても心を打たれた。何の罪もなく死んでいった兵隊を、これほどまでに思っている人なんて、ほかにいるだろうか。普通なら、「馬鹿かあの人。どうして他人にそれほどまでしてあげなければいけないのか。」と10人中9人まではそう思うであろう。僕もそう思ったぐらいだから。しかし水島上等兵は、そういうことのできる、とつてもすばらしい人だと思った。

それと最後に、こんなすばらしい作品なら、映画を見に行けばよかったな。

『銀河鉄道の夜』

(宮沢 賢治)

1 E 平 本 朗 子

私は、この本のように、天の川を乳の流れたあとなどと思った事はありませんが、ここを読んで、こういう表現もあるんだなと思いました。

カムパネラは、ジョパンニが、先生の質問に答えられないのを見て、自分も分かっているのにジョパンニが、気の毒で、答えなかったところで、友達思いの優しい人だと思いました。

それからジョパンニは、働きながら勉強しているので立派だと思いました。でも、仕事で疲れて、授業をちゃんと受けられないのでは、なぜ勉強するのか分からないと思います。

ケンタウルス祭などという神秘的な名前の祭があって、私もこの祭を見たいと思います。

ケンタウルス祭の夜、ジョパンニはザネリ達にいじめられた。その中には、カムパネラもいたのに、何も出来なかったところなど、まるで、私のようななほと思いました。私も多勢の中にいるとつい、悪口は言えないけれど、相手をかばう事が出来なかった。ここを読んで、自分の勇気のなさをつくづく感じました。

そして、ジョパンニとカムパネラは、銀河鉄道の小さな列車に乗って銀河の旅に出ました。各停車場は、星座の中の一番明るい星になっているし、その場所ごとでいろいろ不思議な事があって退屈しないだろうと思いました。

例えば、銀色のすすきが生えていたり、りんどうの

花が咲いていたりその花やすすきはこの世の物よりも、一段と美しく、私も一目見たくてたまらなくなります。それに、河原の砂や小石は、トパーズや水晶できており本当に星の世界という感じがしました。

また、旅の中で、2人はいろんな人と出会いました。その中の鳥を捕る人は不思議でした。鶴や雁、鷺を捕るのですが、その捕り方は、手づかみに捕って袋の中に入れていけるような簡単な方法ですが、袋の中に入れてられた鳥が光るといのが不思議ですし、そして平べったくなった鳥をその形のままで食べるといったところも、地上とは違うと思いました。

それから、天上へ行ったり、渡り鳥に信号を送って交通整理のような事をしたり、神秘的でおもしろい世界だと思いました。

最後に、ジョパンニがみんなのために幸福をさがすと決心して、それから目を開くと丘の上にもどっていました。そして牛乳をもち帰る途中、ザネリが川へ落ちカムパネルラが助けに川に入って、行方不明になっていました。「45分たったのでだめだ。」とカムパネルラのお父さんが言った。ジョパンニは、彼は銀河のはずれにいるような気がするところから、カムパネルラは、まだジョパンニのように、自分の道を見付けられなくて銀河鉄道の旅を続けているのだと思いました。

この物語を読んでいると、一度は銀河鉄道の夜を味わいたくなってきました。



『大工道具の歴史』

(村松貞次郎)

1 A 甲 斐 幹 夫

道具というものはぼくたちにとって大切なものである。それは、ただ加工するというだけでなく、モノの手ざわり、材質、質感が道具を通じてたしかめられる。いわばモノとの通訳者である。もっとも親しいモノであった日本の木との永い対話の歴史の有能な通訳を果たしてくれたものが木工具であり、大工道具である。もちろん大工道具を使って仕事をする大工にとっては、道具はモノとの対話の通訳者などと悠長なことはいっておれない。それは大工の手の延長であり、きびしく利鈍が選別され、酷使される労働手段である。まさに生きるための道具である。「女房を質に入れてでも」といわれたほど優れた道具への執着も、その道具による労働生産性の高さ、仕事の出来ばえのよさに期待を寄せていることを見逃すことはできない。

ところで、古くから日本の生産のための道具の王座にあった大工道具も、いまだ健在の一面もあるにはあるが、全体としては亡びつつあり、変質しつつある。戦後の目ざましい機械化、電動化の進展によって、手作業の道具は急速に姿を消している。経済の高度成長の中で、道具を使って生産をということ自体遅れたものであり、近代的な生産に移行すべきものとされてきたから、その消失の速度の早さも当然だと思う。また工事方法や材料の変化に応じて、使われなくなった道具も多い。しかし、大工道具が建築史上で果たした役割は大きく古代の大寺院や一般の民家にいたるまで、その建築を可能にしたのは大工道具であった。

ところで、とくに古い時代の大工道具の探索、すなわち、ある種の大工道具の存在の有無、その形態、使い方あるいは同じ種類の道具でも、その歴史的な変ぼうを知るのはなかなか難しい。ごく古いところで古墳などから発掘されるものがあるらしいが、木部は腐って失われていて、刃物では鉄が酸化して、正確に原形を復元することが難しい場合が多い。しかし文献や絵巻物から歴史の変遷を知ることができる。絵巻物に描かれた大工道具と現代の大工道具を比較して、ぼくも見たことのないものがあり興味深い。

大工道具は使う前につくられるものだとわれている。相手にする木の性質に応じて、ノコギリの目立ての仕方が変わり、カンナの刃の台のすげ方、さらにその刃の研ぎ方も、使用するトイシも変えられる。改良に改良をかさねて江戸時代にやっと現在の大工道具がほぼできあがった。木のように複雑な性質をもつ対象物で道具を作る。つくるためにはやはり木との永い対話の経験がものをいう。相手を知らなければどうにもならないからだ。道具作りの上手な大工ほど腕がいい、というのも、その対話の経験の大きさと内容の充実とを物語る言葉であろう。もちろん、それはきわめて高度で、専門的な対話である。そういう意味でなまやさしいものではないのである。

『どくとのマンボウ航海記』

(北 杜夫)

2M 井 深 圭 介

とにかく面白い旅行記である。どこまでが本当でどこまでがウソなのか、見当がつかない。

この本を読んで、誰もが気づくのは、そこにみなぎる少年のような好奇心であろう。このことは、旅に出た理由が、西洋文化がどうの冒険がどうのということではなく、マダガスカル島のアタオコロイノナというわけの分からないようなものを出していることでも分かる。

世界を船で渡り歩いていくわけだが、その土地での生活、習慣などを、大変おもしろおかしく書いている。

シンガポールでは、バナナ売りにむりやり高い値段で売りつけられたり、ピヤホールで各国のビールを飲み比べたりしている。

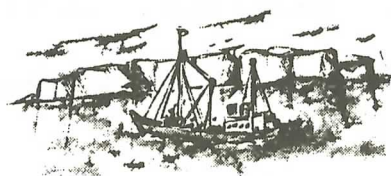
マラッカ海峡では、昔ここでデ杯選手が投身自殺して以来自殺の名所となっているのを、黒い海面は、水というより足を踏み入れてもそのまま歩いていける道のようにと言っている。そして、身を投げるといふより身を移すと表現している。

アフリカ洋では、マグロを食べる海のギャングであるサメを砂糖水で殺す話は、普通の人でそう知っている人はいないのではないだろうか。それにしても、それにつけ加えてコーヒーでサメを殺す所あたりは、本当ともウソともよくわからない作者のユーモアがに

じみ出た表現であろう。また、マグロのおいしい食べ方を示して読者の興味をそそるあたりも、なかなかうまい手法ではないだろうかと思う。

話はわかるが、作者はかなりの酒好きらしく、どの土地に行っても、また、船の中でも飲んでる。それも、ビールに始まり、ウイスキー、焼酎、ブドウ酒、ブランデー、となんでもあれば飲むようである。彼の酒を飲んだの話は、かなり多く書いてあり、どれも信じられないくらいいたのしいのだが、中でも一番彼らしいユーモアというのは、「ウイスキーを減らさずに飲む方法」であろう。これは、船の中でなくなってきた時に考えたものである。まず 箸と氷の小片と コップに三分の一ほど満たしたウイスキーを用意する。箸で氷をつまみ、それをウイスキーにひたし、これを口の中に運んでしゃぶるのである。氷の味しなくなりたら再びウイスキーにつける。この方法は氷がウイスキーに溶けるためいつまでたっても中身が減らないのである。しかし、彼のいつもの話と同じく、やはり最後はガブ飲みしてしまうとオチをつけている。

結局、彼の文章というのは、大人から子供まで、例外なくおもしろおかしく読める数少ない優秀作品の一つに数えることができるだろう。



『塩狩峠』

(三浦 綾子)

2E 若 林 整

この本は、新約聖書のヨハネ伝第12章24節の文を冒頭部分で取りあげていて、キリスト教の話であることを匂わせている。

主人公の永野信夫は、明治10年生れで、この時10歳で、祖母トセと、父貞行の3人暮らしで、母菊は、信夫を産んで死んだと信夫は聞いていた。しかし、ある日突然トセが死んだ。すると、貞行は、菊とその子、待子を連れて来て家族4人で暮らすようになった。実は、菊は死んだのではなく、ヤン（当時のキリスト教

信者の呼び名)であったために、トセに追い出されたのであった。そして、貞行までがヤソであった。信夫は不愉快であった。なぜなら、食事の前には待子を含めた3人がお祈りをし、日曜日にはその3人が教会に行く。自分だけが仲間はずれにされているようであるからである。

そんな頃、信夫の小学校の友で大人びた考えをもつ吉川修と2人で僧侶になることを約束した。しかし、修とその妹で足が不自由なふじ子、その母三人が借金苦のためえぞへ夜逃げする。

しかし、信夫と修の仲は悪くならず、文通という形で仲を保ち、意見交換をした。

その後、信夫の父が倒れて死んだ。そしてキリスト教で葬式が行われた。その頃、信夫は中学校を卒業する年であった。この頃から、トセ、貞行の死によって、死とは何なのか、生、命とは何なのかを考えるようになり、吉川と意見交換をした。又、年齢からか、性、愛についても考えるようになった。それから発展し、仏教の矛盾を感じ、キリスト教は否定しながらも聖書の言葉に感銘をうけたのであった。

その愛の対象は吉川の妹ふじ子であった。しかし、ふじ子は、肺病とカリエスにかかり、2年程寝たきりとなっていた。その思い一すじに信夫は北海道に渡り、札幌の鉄道会社に就職した。

ある日札幌の町角で信夫はヤソにキリスト教の話聴き、感動した。それ以来信夫はヤソになり、日曜学校の先生をするまでになった。

その後ふじ子の病気が治り、ついに信夫とふじ子は婚約した。そして結納の日。札幌へ向かう列車は信夫を乗せて塩狩峠を上っていた。峠をもう少しで乗り越えようとした時、客車が機関車と離れ、信夫達を乗せた客車は峠を下り、加速していった。そこで信夫は冷静にデッキのハンドブレーキをひいた。しかし車は止まらず、ついに信夫は、客車の進行方向のレールに身を投げ、車を止めた。その信夫の判断はキリスト教の教えからであった。

この小説は、キリスト教信者である作者が実在者である長野政雄氏を信夫として描き、キリスト教の月刊誌に連載されたものである。

『路傍の石』

(山本 有三)

2 C 横 山 修

『路傍の石』は、山本有三という作者によって1937年(昭和12年)1月1日から6月なかばまで、第1部が、東京・大阪朝日新聞に連載されましたが、時局が急迫したため、第2部は新聞にのりませんでした。それで、翌年11月から『新編路傍の石』として、雑誌『主婦の友』に連載されました。

次に、作者である山本有三は栃木県栃木市に旧宇都宮藩士の長男として生まれました。本名は勇造です。

父は維新後、裁判所につとめていましたが山本有三が生まれた頃には、呉服屋を営んでいました。作者が15歳の頃、東京の浅草の呉服屋へ奉公にだされましたが、本好きで商人になることをきらって、故郷へ帰りました。その後上京し、東京中学校の5年生に編入し、第1高等学校(現在の東京大学教養学部)文科にすすんだ。

内容ですが山本有三は、次のような言葉を残している。「たったひとりしかいない自分を、たった一度しかない一生をほんとうに生かさなかつたら、人間、うまれてきたかいないじゃないか。」という作者の言葉はこの小説の中で鉄橋にぶら下がり、死にそうになった吾一少年に、次野先生がさつ言葉ですが、それはまた『路傍の石』の主題です。

では、吾一について説明していきたいと思う。吾一は、クラスの中では、あまり目立たない方だったが、勉強はよくできた。ある日友人と、話しているうちに、自分は鉄橋にぶら下がったとうそをついてあとへひけなくなってしまった。そのときやけくそになりながらも鉄橋にぶら下がったことからみんなから小英雄のような扱いをうけるようになった。

吾一は、中学にいきかかったが家の都合により、奉公にいかなければならなくなった。そこで名前を、五助にかえられた。その後も、小僧といわれて名前を呼んでももらえない時期があった。奉公先から飛び出し、



父の住んでいたところへ行ったら父は亡くその人にきつかわれた。しばらくすると、そこも追い出された。その後、おばあさんについてお葬式のひきものをもらって歩くなど苦労を重ねた。そこで次野先生に会い夜学の商業学校に行くことになった。

そして、吾一という名前の良さをもう一度考え、恥ずかしくないように生きなければならぬと考えたのだ。

吾一の人生は、まるで道ばたの石ころであり、とある人にふまれたり、けられたりしても、それに耐えています。たとえ世のかたすみにも、強く生き抜く力を持つという作者の励ましをこの『路傍の石』から受けとることができる。

『野 火』

(大岡 昇平)

2A 曾 根 千 栄

まず、この話のあらすじを述べる。主人公は田村一等兵という肺病におかされ、軍隊を追い出されてしまった男である。この田村が初めは「生きたい。」と求めて病院へ行って入院させてくれるようなのんびりしていたが、いつか自分は生きていても死んでいても同じような人間で、ただ死ぬきっかけがないから生きているのだと考えるようになった。だから彼のむてっぽうな行動の裏には、「どうせ生きていたって…」という気持ちがいつもあった。それは「生きたい、死にたくない。」という強い気持ちを持った人よりも、いわばラッキーな結果を招き、いろんな人に助けられて日本に帰りつくことができた。が、その時はすでに田村は昔の田村ではなく全くちがう田村にかわっていた、というのがこのあらすじである。

この田村という男の人格が変わってしまったのには理由がある。軍隊を追い出され、病院を追い出された田村は、同じような立場に立たされている仲間たちと座り込みをしたが「どうせ生きていても…」という気持ちからその仲間と離れて1人で歩き出す。そして山の原住民の作った畑にたどり着き、食糧にありつく。が、何日かたってその山のふもとに見える十字架を見て教会を見たくなくて山をおりた。しかしその村には人がいず、人と呼べるのはその辺に転がっている屍体

ぐらいだった。しばらくその村で休んでいると、どこからか若い男女の声がして、それがだんだん近付いて来た。しばらくその声を聞いていたが田村はふいに彼らの目の前に出て「マッチをくれ。」と言った。女は悲鳴をあげるばかりで、田村は殺す気はなかったのが発砲した。たまは女にあたり息絶え、男は逃げた。この女を殺してから、田村は何かにとりつかれたかのように、人格が変わっていったのだった。

野火とは、秋の穀物の殻を焼く火のことであるが、この話の中での野火のイメージはとても暗く不気味である。というのは、この時、野火は日本兵がいる場所を知らせるための合図であったためである。また、最後に田村が野火のまわりで頭をなぐられ、記憶を失ってしまったことが分かった時、その不気味さはいっそう増したといつて良い。

田村は戦地から帰ってきても人を信じることができない人間になってしまっていて、精神病院に入れられてしまった。そればかりでなく、妻からも愛されなくなり、とうとう一人ぼっちになってしまった。とてもかわいそうだと思った。もし戦争がなかったら、神のような何かにとりつかれたこともなく、記憶も失うこともなかったはずである。田村は、戦争の被害者だともいえるだろう。過去にこのような悲劇があったら、かなしいことだと思う。



『ソクラテースの弁明』

(プラトーン著・田中美知太郎訳)

2 E 東野幸成

ソクラテースは訴えに対して弁明する。ソクラテースは自分を訴えたものは2通りあると述べている。最初に訴えた人たちとそのいつわりの訴え、そして後からの訴えと後からの訴人たちである。なぜ訴えた人を前述のように分けているのかというと、最初の訴人たちは昔から長い間本当のことをいわずにソクラテースのことを悪く述べており、大多数のものは子供のときから聞いており、これからソクラテースに対する中傷が生まれ、これを信じたメレートスも訴えたのである。そのもとの訴えとは、ソクラテースが天下地下のことを探求し、弱論を強弁するなど、いらざる振舞いをなし、この同じことを他人にも教えているということである。しかし、これらのことはどれも事実ではなく、人に教育する知識を持ってないとソクラテースは述べている。

では、どこからソクラテースに対する中傷が生まれ、なぜ知者の名をもたらしめたのかという疑問がわいてくる。ソクラテースはこれに対して自分にはある一つの知恵があると述べている。その知恵はどういう種類のものか？ソクラテースはデルポイの神（アポロン）の証言を行う。それはソクラテースよりも知恵のある者はいないという神託である。ソクラテースは無知を自覚しているのに、神はソクラテースがいちばん知恵があると宣言している。そこで神託を反駁しようとして誰か知恵があるとされている人を訪ねることにしたのである。最初に政界の人と問答をした。この人は他の多くの人々からも知恵があると思われ、自分でもそう思っているが実はそうではないとソクラテースは思った。そしてソクラテースは政界の人よりも知恵がある。なぜならこの男もソクラテースも、善美のことがらは何も知らないらしい。しかしこの男は知らないのに知っているように思っているがソクラテースは知らないから知らないと思っている。このちょっとしたことでソクラテースのほうに知恵があるのだ。ソクラテースは政治家の次に悲劇作家やその他の作者のところを訪ねて行った。ソクラテースはこれらの作家について、彼らが作品を作るのは自分の知恵ではなく、何か生まれつきのものであり、

神がかりによるものであることを悟った。また、作家たちもこれに似たような弱点をもっている。そしてソクラテースは彼らが作家として活動しているから、自分が世にもたいへん知恵のある人間だということを実際にはそうでない他のことがらについても信じこんでいるのに気がついたのだ。最後にソクラテースは手に技能をもつ人たちのところへ行った。彼らはソクラテースの知らないことがらを知っていて、その点では、ソクラテースよりも知恵を持っていた。しかしこの手工者たちも作家たちと同じ誤りを犯している。つまり技術的な仕上げをうまくやれるからというので、めいめいそれ以外の大切なことがらについても、当然、最高の知者だと考えていることが同じ誤りなのだ。ソクラテースはこのままのほうがいいのか、それとも手工者のように知恵と無知とを共有するほうがいいのか自分自身に問い直し、このままのほうがいいという答えを出した。



神託を反駁しようと詮索したので、多くの敵意が向けられ、前述したように中傷もここから生じたのであるといえる。そしてメレートスやアニュトス、リュコーンがソクラテースに対して攻撃を加えたのもこれが原因なのである。

次にソクラテースは後期の訴人に対する弁明をする。訴えられた内容は、次のようなものである。「青年に対して有害な破滅的影響を与え、国家の認める神々を認めずに、別の新しい鬼神の類を祭っていると。」そこでソクラテースはメレートスと問答する。問答していくうちにソクラテースはメレートスが青年のことに何の関心もないこと、ソクラテースが青年に対して害悪を与えていないこと、新しい鬼神の類をメレートスが神であることを認めて、この訴えを退ける。ソクラテースは次の言葉を述べて死の危険にさらされていても恐れていないことを示す。「すべての人が知を愛し求めながら、生きていかなければならないのに、死を恐れるとか、何か他のものを恐れるかして、命ぜられた立場を放棄するのは間違いである。死を恐れるということ

は、知恵がないのにあると思っていることにほかならない。なぜなら、それは知らないのを知っていると思うことだ。死を知っている者は誰もいないのである。だから恐れたり避けたりしないのだ。」と。ソクラテスはこうもまた言っている。「私が行っていることは、精神ができるだけすぐれたものになるように気をつけて、同程度でも身体や金銭のことを気にしてはならない。」と説いているのだ。なぜなら、金銭をいくらつんでも、そこからすぐれた精神が生まれてくるのではなく、金銭その他のものが人間のために善いものとなるのは、すべて精神のすぐれていることによるものである。ではなぜソクラテスが私交では以上のようなことを勧告するのに公に大衆の面前でこれらのことをしないのであろうか？それはソクラテスに何か神の知らせとか、鬼神からの合図とかいったものが起こり、彼に対して国政にたずさわることに反対しているからなのである。ソクラテスは次々と話をすすめていく。その中に哀訴嘆願について語ったものがある。「私はそういうことをしない。別に諸君を軽蔑するわけでもない。そういうことをするのは恥辱であり、醜態である。」と。

有罪か無罪かの決定が投票によって行われ、ソクラテスは有罪と票決した。ソクラテスは双方の投票の結果出てきた数に驚いた。なぜなら僅差であったからだ。有罪決定の後、次には刑量を定めるために、ソクラテスが申し立てを行う。ソクラテスは自分の刑は市の迎賓館における食事が至当であると言った。ソクラテスはこのことについてこう述べている。「何ごとにも不正を加えることをしていないのだから、自分自身について、自分のほうから、何かの害悪を受けるのが当然である。と言って、自分自身のために、何かそういう材料を申し出て、自分自身に不正を加えようとすることは、わたしの思いもよらぬことなのだ。いったい何を恐れて、そんなことをしなければならぬのか？」

刑量の票決の結果、ソクラテスは死刑となった。ソクラテスはこの結果、死刑を票決したものに対して次のようなことをいっている。「わたしが敗訴になったのは、言葉の不足ではなくて、厚顔と無恥が不足したためである。そしていまのやり方で弁明を行って、その結果死ぬことになったとしても、むしろそのほうがずっとましだと思っている。なぜなら死をまぬがれるためには、何でもやるというような工夫はなすべきも

のではないからだ。」

ソクラテスは無罪の投票をしてくれたものだけを裁判官と呼んでいる。そして彼らにこういう話をしている。妙なことに神の合図がわたしが何をしてもひきとめなかったと、つまり今度の出来事は、どうもわたしにとって善いことらしい。死ぬということは次の2つのうちの1つなのだ。死者は何も感じないのかそれともたましいにとって、この場所から他の場所へと場所をとりかえるかなのだ。しかし諸君にも死というものに対して、よい希望を持ってもらわなければならぬ。そして善き人には生きているときも死んでからも、悪しきことは一つもないのであって、その人は何と取り組んでいても、神々の配慮を受けないということはないのだという、この一事を、真実のこととして心にとめておいてもらわなければなりません。



ソクラテスは最後にこういう言葉で締めくくっている。「もう行かなければならない。わたしはこれから死ぬために、諸君はこれから生きるために。しかし、われわれの行く手に待っているものは、どちらがよいのか、誰にもはっきり分からないのだ。神でなければ。」

僕がこの本を読んで感じたことを書いてみる。まず最初にソクラテスが自分を訴えたものに2通りあると述べているが、僕もそう思う。子供のころからソクラテスへの悪口を聞かされているのである。当然、誰でもソクラテスというのは悪い奴だと思うでしょう。ソクラテスの言葉を借りると欠席裁判にかけられるとあるが、まさにこういうことをいうのだろう。次に死についてのところであるが、ソクラテスはとてもすごいと思ってしまった。なぜなら、人間は死について別に教えられたわけではないが、何かしら恐怖を抱いているものである。しかしソクラテスのいうとおり死を知っている者は誰一人としていないのであって、別に恐れたり避けたりしなくてもよいのであるが…。

また精神ができるだけすぐれたものになるように気をつかい、身体や金銭のことを気にするなどあるが、やはり我々はすぐ体裁を気にし、精神よりも身体や金銭のほうに気をつかいがちだが、こういうことも見な

らわなければと感じました。

最後にソクラテスがいった言葉はとても印象深いものでした。僕はソクラテスが神にすべて（後世のことも）任かせたとあの短い言葉の中に含ませているような感じがするのです。この本を読んでとても良かったと思います。ほんとうに…。

『ソクラテスの弁明・クリトーン』
(プラトーン著・田中美知太郎訳)

2 A 山 根 千 弥

私はこの『ソクラテスの弁明』を読み始めた時、「なんて読み易い本なんだろう。」と思った。というのは、『ソクラテスの弁明』を読む前に、私はアリストテレスの『ニコマコス倫理学(上)』を読んでいたからである。

『ニコマコス倫理学』はアリストテレスの中で最も読み易く、書店で『ニコニコ倫理学』と呼ばれる程よく売れる、ということだったのでそれなら私にも読めるのではないかと、(私には、哲学について述べてある本というのは、たいへん難しく、理解に苦しむ、という一種の恐怖観念らしきものがあるので)と思い読み始めたのだが、見事に期待をはずされてしまった。難しいのである。特に文章の表現の仕方、言い換えると、言い表し方が難しいのである。原文を忠実に訳したからであろうが、そのため日本語にすると、ややこしくなるのである。私は、読んで意味がわからない文章は何度も読み直し、意味が理解できるまで先に進まない、というたちなので、今回も当然の如く、それをやったのだが、その結果、30ページもいかないうちに、精神が疲労して、いったんそこで読むのをやめてしまった。しかし、このことについては私の読解力の不足が原因なのかもしれないと反省している。

話が『ニコマコス倫理学』の方へとんでしまったが、とにかく以上のようなことから、私には『ソクラテスの弁明』がとても読み易いように思えたのである。

『ソクラテスの弁明』は、初めから終りまですべてソクラテスの「ことば」で記されている。ソクラテスの裁判の弁明部分を、実録風にまとめたという方がいいのかもしれない。とにかく、ソクラテスはアテナイの人々に語っているのである。だから私は『ソク

ラテスの弁明』を“読む”ではなく“聞く”という感じで読んでいった。



ソクラテスが“問答法”によって、真実の知識に到達しようとしたことは有名である。この裁判の中でも、ソクラテスは、自分を訴えた人間の一人メレトスと問答をやっている。私はこの二人の間答を聞いて、いかにソクラテスが親切であるかよくわかった。というのは、この問答の中でほとんどの場合、ソクラテスは自分が聞こうとするところの質問の説明をくわしくしており、答えを二つ出して、二者択一の形にしている。極端に言えば、メレトスはどの質問においても「Yes」か「No」と答えればいいのである。そのため、ソクラテスが言った言葉に対して、メレトスの言葉はたいへん短く、少ない。「これでは、問答になっていないのではないのかしら。」などと思いつつ、メレトスの答えが矛盾していくのにおかしさを感じた。

確かに、ソクラテスという人物は偉大であると思う。人々から非難の目で見られようがおかまいなしに、真実の知識を追求するというのは、凡人にはできない。真実のためには死をも恐れなかったということからでも、ソクラテスの偉大さは語られると思う。しかし、私はどうしても心にひっかかる部分があった。それは、52頁の中のソクラテスの言葉である。「アテナイ人で、すぐれたところのある、傑出した人物というのが、直接彼らの間で、特に選ばれて国家の要職その他の名誉ある地位についているが、これらの人物は、婦女子と少しも異なるところがないではないかということです。」

これはどういうことなのか。この優れた哲学者、ソクラテスの中にも、男尊女卑という考え方があったのだろうか。それとも当時の女性というのは、そんなに劣っていたのであろうか。私が男性だったなら、別に気にもとめなかつたであろうが、女性であるということからつい気になってしまった。もちろん女性が男性に優れているとは言わないし、とうてい言えないであ

うが、もし、先哲の中に男尊女卑の考えがあったのだとしたら、何となくがっかりする。

『ソクラテスの弁明』についての説明・感想はこのくらいにして、『クリトーン』について書こうと思う。

『クリトーン』は、裁判で有罪となったソクラテスが獄中にいるときに、ソクラテスの竹馬の友であるクリトーンが、彼を助けにやってきた時の話である。「話」といっても、ソクラテスとクリトーンの会話をそのまま文章にしたものである。

私はこの二人の会話を聞いて、ソクラテスは幸せな人だと思った。と同時に、クリトーンは、本当にソクラテスを大事に思っていたんだなと思った。それは最初の部分で、会いに来た時に、眠っているソクラテスを起こさなかったことでもわかる。「できるだけ気持ちよく過してもらおうと思ってね。」、この台詞は私にはとうてい言えないだろう。というのは、もし私がクリトーンだったなら、どんなに深く眠っているのが、叩き起こして、一刻も早く逃げるように説得し始めるだろうと思うからだ。

処刑が明日になるかもしれないということで、ソクラテスに脱獄を頼みにきたクリトーンであったが、ソクラテスは問答により、「私は逃げるべきではない。」という答えをだした。この時クリトーンは、言いようのない、悲しみや、怒りや、絶望感、その他もろもろの感情に襲われたに違いない。でも、それ以上反論しなかったのは、やはりソクラテスを理解していたからだろう。“真実にしか従わないソクラテスの心”に、何を言っても無駄であるということが、よくわかっていたからだと思う。実力行使でソクラテスを無理矢理に脱獄させることもできただろうが、それをしなかったのも、やはりソクラテスを、そしてソクラテスの生き方を大切に思っていたからなのだと思う。



『ビルマの豎琴』

(竹山 道雄)

3C 家頭真一

読書というものの自体、苦手でしかも内容を理解することの下手な自分でも、この本はとてもおもしろく素晴らしいものでした。読んでいる最中、そこに書かれてある風景とか状況を想像させられたり、推理小説のように先を読むのを楽しくさせられたりしました。また考えるという大事なことも与えられました。

それは戦争というものについてでした。戦争は多くの人間をこの世から抹消し、多くの夢と希望を奪い去ったのです。しかしそれは後に、残された人間にその奪い去った数だけ、何かを教えてくれたのです。その何かとは例えば戦争の悲惨さ、命の大切さ、生きるということの素晴らしさではないでしょうか。私達は戦争というものがない時代に生まれ育ってはきたが、この本などによりそれを知り、上に挙げた事柄を感じるのです。水島という人も敗戦後、ビルマに残される日本兵の死体により心の中に一つの信念というものが出来上がったのでしょうか。

ところで私が唯一この本の欠点と思っていることはビルマの野蛮人に水島が捕われた部分でした。話が異常に過剰になりすぎて幼稚になってしまっているのです。それもそのはずで、これは童話雑誌に連載されたとのことでした。ただ話をおもしろくしたいと思う作者の気持ちが書かれているようで、私の気持ちとしてはとても残念に思うのです。この部分がなくても、この話は十分すぎるほど素晴らしいはずなのにこの部分があるために全体が実際になかった、全てがでっちあげられた話のように受けとってしまうのです。しかし、水島の手紙の部分は、強く感動を与えられました。手紙には作者の主張したい全てが書かれてあったと思います。隊員達と水島との友情や音楽の中から引き出される人間の素直な心というものを私達に語りかけているようにも思われます。

水島がビルマに残るということは、前にも述べたように強く感動させられました。私がおも水島の立場であったならば、自分の利益にもならないことをしただろうか。ただ自分の犯した罪でもないのに水島がビル

マに残ったのは、水島自身、責任感が強いことから国の犯した罪を代表となってつぐなおうとしたのであろうか。それとも、誰も知らない所で朽ち果てる人間に対する情緒からなのであろうか。またその両方からか、それ以外にも根拠があったのだらうかと私は理解に苦しむのです。この本では仏教というものが大きな役割を果たしており、小乗仏教の伝わるビルマでは苦行をすることにより自分に救いを求める国である。上で述べた疑問はこのことにも大きく関係しているはずである。水島自身、自分を苦しめることにより、戦争で傷つけられた心の中に救いを求めているようにも解釈できると思います。

この感想を書くにあたってこの本を読んだのですが、これが、話にあうように後から場所や音楽の題や敵兵が決められたと思うと、とてもおもしろく思われてなりません。

『ある微笑』

(サガン著・朝吹登水子訳)

3 A 寺内美枝子

初めてこの書名に出会ったのは、ある本の巻末、「女性のための推薦書」という項目の数多くの書名の中でした。なんとなく印象に残っていたので、書店の本棚の中に有ったのを見付け、手に入れました。

この本は恋物語で解説によると、著作者の『悲しみよ こんにちは』（作者の18歳の時の処女作である）の次作である。前作が非常に好評だったので、この作は人々から希望され、好奇心や冷ややかな目で待たれていました。そのような中で出版されたこの本は、前作よりもっとよい評価を受けて、彼女は一人前の作家として世の中に認められました。

サガンは主に、人生に倦怠している人々を描いている。この本の主人公、ドミニックもそういう女性である。

ドミニックは、パリに住む20歳の大学生。彼女にはベルトランという情人がいる。ある日、彼はドミニックに彼の叔父、リュックを紹介した。リュックは、灰色の瞳をしていて、疲れた様子をしていて。そしてある意味で彼は美しかった。彼女は、リュックの家に招待され、彼の妻と三人でウイスキーを楽しみ、街へ出

掛けることを繰り返した。そんな折、彼女を気に入っていたリュックは二人で秘密の旅行をしようと提案し、ドミニックはそれを承知した。カンヌでの二週間は彼女にリュックを愛していると自覚させて終った。しかし、その旅行が友人達を介して、彼の妻やベルトランに知れた。ドミニックはベルトランと別れ、長い苦しみした後、微笑せずにはいられない自分を知る。

極簡単な恋物語ではあるが、不倫の恋の苦しみもさりりと書き上げていて、ドミニックのリュックに惹かれていく心情もよく読みとることができる。又、リュックの妻、フランソワーズは、ドミニックとは対照的に成熟した女性像である。優しく夫やドミニックを包み、夫とドミニックの旅行が知れた時も、ドミニックに肉体的な嫉妬を感じてはいるが、彼女を愛し、慈しむことのできる女性である。ベルトランに関して言えば、最も損な役割である。彼の言動は、大抵、リュックを大人の男として引き立てる材料となっている。

さて、なんと言っても、一番印象深く、そして一番有名なのはこの本の締めくくりであろう。その部分を抜き出して、終りにしよう。

「私は不意に鏡の中の自分を眺めた。私は自分がほほえんでいるのを見つけた。私はほほえむことをやめることが出来なかった。再び、私は知っていたのだ、自分が独りだということ。私はこの言葉を自分自身に言ってみたかった。独り、独り。けれどもそれが一体なんだ？ 私は一人の男を愛した一人の女だった。それは単純な物語だった。鹿爪面をすることもないのだ。」



『異邦人』

(カミュ著・窪田啓作訳)

4 C 本 田 久 直

この僕の読んだ『異邦人』は、はっきりといてあまり面白い方とはいえない類の物であるが、流石というか強く印象として残った。特に主人公であるムルソーに非常に興味を持った。その事は後に取って置くとして、あらすじを簡単に書いてみる。

主人公であるムルソーは平凡な労働者である。彼はひどくしらけた人生観を持っている。母親が死んでも、ほとんど何も感じないし、恋人らしい女性はいるが、彼女を愛しているわけではない。彼は口癖がよく、「それはどうでもいいことだ。」と呟く。ただ彼は自分の意志や感情に逆らったことは何もしたくなく、たとえ母親が死んでも、彼にとって悲しい出来事であれば、あまり悲しい顔をしなない。友人と遊びに行くにも、彼はすべて成り行き任せ。海へ行こうといえば海へ行き、水に入りたくなると泳ぐ。たまたま、そこで喧嘩に巻き込まれ、海辺でアラビア人と殴り合った後で、この喧嘩が変にこじれて、彼は友人から預ったピストルでアラビア人を射殺してしまうのであるが、そこで自分の仕出かした事の重大さに改めて仰天はしない。そして、一発で即死した相手の体に、なお4発も無意味に発射してしまうのである。

ここまでが、小説の第1部であったが、これから第2部に入る。第2部では、この青年ムルソーへの訊問と裁判についてである。

これまでからもわかる様に、彼のような人間を裁く事は容易ではない。弁護士は己の職務上、何とかして彼の射殺事件を殺意のない偶発的なものにしたと考えるのだが、彼の答弁は被告側に有利な材料となるには、ほど遠いものばかりで、弁護士を悩ませる。予審判事に対して、彼の応答はいわゆる正常ではない。予審判事が最も注目したものとして、彼が一発で即死している相手に対して、なぜ4発も更に打ち込まねばならなかったということであった。しかし、彼の場合には最初の1発でさえ何の意味もなかったから、当然それから後の4発には何も意味はない。だが、もちろんそのような説明が予審判事に通用するはずはないし

世間の誰に対しても説得力をもつことはできない。

そして裁判が開かれる。裁判長と陪審員の前で、検事の論告は予想通りきびしいものであった。なぜなら、ムルソーのような「動機なき殺人」ほど、善良な市民社会にとって迷惑なものはないからだし、このような犯罪人は、何よりも良識の前にひとたまりもない。したがって、事件は当然ムルソーに不利になっていった。

こうして、裁判長は彼に対して「フランス人民の名において」死刑を宣告するのであった。



さて、『異邦人』の最後の1章に、このようにして死刑囚となったムルソーが、この思いがけず自分に陥ち込んでしまった「状況」について、これは一体どういうことかを考えることから始まる。これはたいへん非常識なことなのだが、彼はまず自分が死刑囚になることを全く予想していなかったように思える。特に、死刑宣告されたところなどは、それだけにショックが大きかったと思う。自分が死刑囚となってはじめて、「死刑」のすべての意味が彼にはわかったのだった。最後でムルソーの望みとして、「私の処刑の日に大勢の見物人が集まり、憎悪の叫びをあげて、私を迎えることだけだ。」で終わっている。

これが、簡単なあらすじであったのだが、なかなか難しかった様に思う。先に述べたのだが、僕の場合はとにかくムルソーという人物が気になっていけなかった。全体的にはしらけた人間ではあるのだが、もっと別の見方があると思う。解説にもあったのだが、僕はムルソーを決して人間の屑だとは思わない。なぜなら、ムルソーはただ芝居が下手なだけであって、逆の面から見ると、馬鹿正直な人間、付き合いが下手な人間であると言えると思う。人はみんなもそうであるけど、自分達が暮らす社会では、なんらかの演技をしなければならぬのは、よく知っての通りである。好きでもないのに好きと言い、悲しくなくても自分の周りがそういう雰囲気だと、悲しそうな演技をしなければ、白い

目で見られてしまいそうな威圧を受ける。いわゆる、「異邦人」として扱われるようになる。時には、この目に抵抗して見せるものの、やはり嘘をついていかなければ、生活の混乱をまねいてしまう。

この本の読みかたとしては、僕の場合はあまりにまっとうではないかもしれない。しかし、この本を読んで、このムルソーという人物を追っていき、今、改めてこの一つのテーマについて考えなければ気がすまないようになっていった。これは、前に述べた事なのだが、はたして、カミュがこの僕が感じたとおりの命題を与えたとは思っていないけれども、この『異邦人』という本を読んで、今まで考えも付かなかった事を問題として自分が感じ、それを少しでも真剣に考えただけで良かったと思う。

あるあとがきに書いてあった事だが、山で道に迷いそうになったとき、登山者は迷わず山の上に登る、というのが登山の鉄則だそうである。沢に降りたら一層わからなくなるからである。時代の文化が混迷し、腐敗し、崩壊に瀕したときも同じで、ひとびとは迷わず古典に戻らねばならない。間違っても時代の有名人や、流行作家に「指針」を求めるようなことをしてはいけない。「名作」とは山の頂上である。とにかく、そこに登れば何かが見える。これから先に希望があるかどうか、あるいは絶望しかないか、いずれにしても、ひとびとは何かを確実に知るだろう。

今回の本を、ちゃんと理解出来たかといえば、全くといっていいほど良くわからなく、感想も支離滅裂となってしまった。しかし、多少とも、山の頂上に登ったのではないかと思う。これが、本当の感想となってしまったようだ。

読書で考えさせられた事

(万引と哲学?)

5 E 小島康義

私は、この5年間で読んだ本といえば、ほとんどが専門書、レポートのネタ、趣味に関係がある本などで、文学書などは数える程しか(5本の指で)読んでいないように思う。

さて、これら以外の種類でおもしろかったものに、社会科学の本が2冊あったので、次に紹介する。

まず一冊は、『万引』という本である。この本は、友達にすすめられて読んだのだが、おもしろいというよりもショッキングな内容であった。これはノンフィクションで、ガードマンが万引をつかまえるといった内容です。いろいろなケースが書かれていて、盗癖のある人間のおそろしさを痛感した。中でも、小学校教師の万引常習者や、家族ぐるみの万引においては、このような教師や親をもった子供たちは、いったいどんなふう成長するのかと、かわいそうになった。特に家族ぐるみの万引は、親子で買い物に行き、親は万引をしては、子供のもっている袋につめこむといったやり方なので、つかまると、「〇〇ちゃん、なんてことをするの」と子供をしかり、その場をつくるおうとするのである。私は、子供がわからないからといって、弱い立場の人間に罪をかぶせるという行為ができるのがどうしても理解できなかった。せめて、このような親や教師をもった子供が、このような大人になりたくないと思って欲しい。



もう一冊は、プラトンの『クリトーン』で、私はこれまでこの本ほど読書を苦痛に感じたことはなかった。これは、2年の夏休みにG先生の宿題で読んだものである。内容は、御存じ哲学書で、一度読んでもあまりピンとこないもので、2度、3度と読んだ。私は、この本で何がしたいかと言うと、この手の本は一般に読みにくいということである。この『クリトーン』にしても短編で、内容もさほどむずかしくないと思う。問題は、ほん訳や解説が、不適切であるように思われる。これらの哲学書は、私の見たかぎり、たぶん過去の哲人の言葉を尊重しようとするのか、直訳したようなおかしな文や、やたら言い回しのがわかりにくい文や、古語が続出する文等、我々の言語生活からかけはなれたものになっている。この点で、哲学書を読むことが、内容のむずかしさと伴って、哲学書を読みにくくしていると思う。できるなら、もっと現代語に近い哲学書を読みたいと、私は『クリトーン』を読んで思った。

これは、工学などで技術者のみでなく、女性でも、子供でも、老人でも簡単に使えるものを作ることが使命であるといったことと同じことだと思う。但し、哲学書などバンバン読む性格でないのではあるが、読みやすい本を作れば、たくさんの方がとりつきやすく、それだけの人が、「ただ生きるのではなく、よく生きる」ことが少しでもできるのではないかと考えている。

以上、私がこの2冊の本より考えさせられたことで

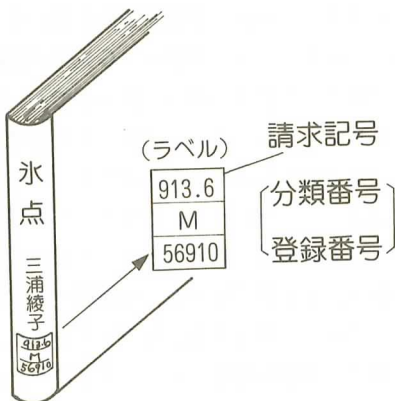
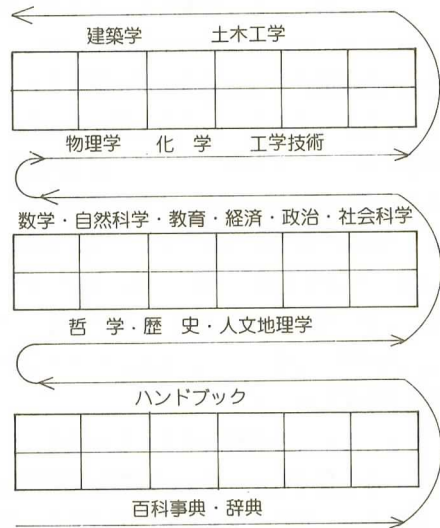
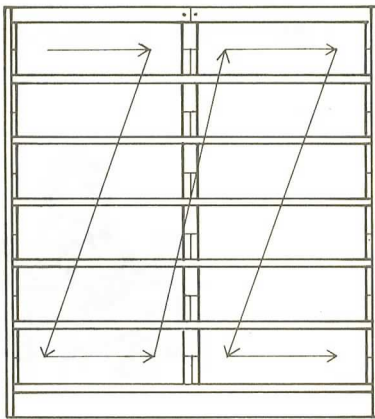
ある。万引など、身近におこる事件であるし、『クリトーン』については、内容については書かなかったが、内容よりも前にのべたことを痛切に感じたのである。

私は1年に1度くらいは、このように本を読んで、いろいろ考えてみるのもおもしろいのではないかなと思う。

利用案内シリーズ 1

図書の並び方 (配架方法)

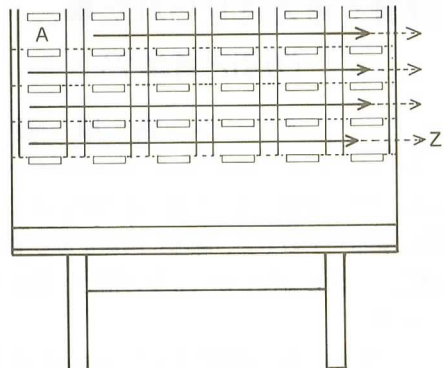
請求記号順



請求記号は図書の下方にラベルを貼って表わし、この記号順に図書はきちんと配架されています。閲覧後は図書は必ず元の配置箇所へ戻すように心掛けてください。

雑誌の並び方

誌名のABC順



東洋人の日本人と
『地球の歩き方—ヨーロッパ』

建築学科 福原安洋

もう2年も前のこと、私は、西ドイツのミュンヘンに滞在していた。ミュンヘンは、ヨーロッパの北と南を結ぶ所に位置し、ビールで有名な人口150万人の都市である。7月になって、市内中心部の地下鉄駅などで、日本人らしい若者をよく見かけるようになった。大抵は、ジーンズにショルダーバッグの軽装で、男女いずれも一人旅のようで周りを珍しげにキョロキョロしている。

“日本人らしい”と言ったのは、ミュンヘンでは、日本人と区別が付きにくい人々がいるからである。台湾、中国、韓国、タイなどからの人である。日本人らしい人の国はどこか？私は、好奇心が強い方だから、まず、服装や身なりから推理してみる。たとえば、白っぽいズボンでシャツの裾をズボンの外に出しているのは台湾ではないか。いかにも質素な服装は中国ではないか。などと一見して分かることもあるが、より正確に知りたくなるのも人情である。そのための簡単な方法を見つけた。それは近づいて「コンニチワ」と話しかけてみるのである。そうすると、相手が日本人でなくても、東洋人同士、何となく親近感があり、話が合うと、国も分かるという次第である。

ドイツ人などにとって、この国別の差は、なおさらわかるはずはなく、まとめて“東洋人”と言っている。しゃくな話だが、ドイツ人には、東洋にある国々の人々は、言葉も生活も、大差ないぐらいに思っている人も多いし、あまり関心がない人が多いのである。だから、ひっくるめて、そう呼んでいるらしい。

さて、話は、元に戻って、夏によく見かけるようになった“日本人らしい若者”達は、共通して、似たような本を手していることに気がついた。それは、『地球の歩き方—ヨーロッパ』(ダイヤモンド社)である。この本を持っているからには、日本人に間違いはない。以後、私は、この本を手にした若者を見かけると、「日本から来たのだな」とはるか日本の高専の学生を想い出して、ニッコリしてしまう。そうすると、以心伝心というか、相手も日本人だから、ちょっと頭を下げた



(by 5 A 宗像 勇)

りするのである。

この『地球の歩き方』という本は、学生が鉄道を使って一人旅をするためのガイドブックで、彼らの体験談による情報が多く載っており、失敗談など読んで楽しいものである。

その情報によると、学生達は、ヨーロッパへ一人でやって来て、観光地を見て歩くだけでなく、たとえばミュンヘンではサッカーやオペラを観たり、ピヤホールで楽しんだりという気楽な旅をしているようである。

もう20年も昔になるが、私も若かった頃、小田実の『何でも見てやろう』という本がベストセラーになった。その著者がアメリカなどを一人旅する冒険に感激し、未知なる国に関心を持ったものである。当時は、一般の人が国外に出る機会はまだであつたし、新婚旅行もせいぜい九州ぐらいであつた。

しかし今や時代は変わったようだ。多くの若い男女は軽装でヨーロッパを歩いているのである。

呉高専でも、最近では、5年生の春休みに外国旅行をする者もいる。全く外国は身近なものになっている。その気になれば、往復旅費を含めて50万円あれば1ヶ



月間は、ヨーロッパを歩くことができるのだ。もちろん、高専の英語力に不安はない。

本校でも卒業式には、カッコいい車であふれ、学生達のリッチさには驚かされている。同じ金を使えるなら、“ヨーロッパなどを歩いてみる”人がもっと増えて良いのではないかと思う。

我々は、単一民族の住む島国に生まれ、同じ黒い髪の色の人々だけを見て育ったことから、金髪にコンプレックスを持っている。一度西洋に行って、西洋人と接し、そこから日本を含めた東洋を感じて見るのは、若い時こそより有意義だと思う。

“極東の日本”といわれるが、極東とは、北極や南極と同じように、地球の果てという意味ではないか。少くとも、ドイツで見た地図ではそうであった。

バーゲンセール雑感

機械工学科 岡部卓治

マスメディアが発達した現在、新聞のチラシやテレビなどで激安、大売出し、〇〇%OFFといったバーゲンセールの宣伝広告が時ある毎にぎやかしている。中には半額近くあるいはそれ以上の値引きで売り出している品も少なくない。このような宣伝広告を見聞きすると、もし必要なものならば買い気を促され、ついショッピングに出かけて行ってしまいたい気持ちにかられる。

しかし、こう年がら年中しょっちゅうバーゲンセールに出くわすと、定価の設定自身疑問に思えてくることさえある。年中行事化しているバーゲンセールに、定価は有って無きに等しい。定価は値引きの引き立て役として大きく貢献しているように思えてくるのである。

私は年末に必要なにせまられてスキー用具一式を買った。人気のあるブランド品は値引きが小さいが、そうでないものは値引きが大きい。同じ値段で比較した場合、名を取るならブランド品、機能、性能をとるならノーブランド品という具合になった。考え迷いあぐねた末、定価が高く値引きの大きいノーブランド品を選んだ。機能、性能に徹した(?)わけである。一般にシーズン始めは値引きが小さいものと相場が決まってい

るけれども、バーゲンと銘打って売り出し、定価のほぼ半額、しかもニューモデルという魅力も手伝って、大枚はたいて買った次第である。

必要にせまられた時、それがバーゲン時なら問題はないが、バーゲン品となり得る品をバーゲン時でないときに買わなければならなくなった時や、バーゲン品を買ったつもりが他店あるいは他日にそれよりもっと安価に手に入ることがわかった時などには、何だか失敗したようなナンジャコリヤといった気持ちになってしまうものである。私の買った品も他店あるいは他日にもっと安くなっているやも知れない。ただ、そのような情報が目や耳に入らぬことを願っている。



(by 5M 八城幸信)

確かに買い手側してみれば、安くて良い品であればそれに越したことはない。けれども、バーゲンセールが年中行事化して日常茶飯事に見られる現在、定価はほとんど有名無実化している。商売にたずさわっている方にはお気に障るやも知れないが、もともと安くできるものを定価としては高く設定し、バーゲンの名のもとに必要な以上に消費能力をあおっているようにも思えてくるのである。自由競争、もうけ第一主義の商戦と言ってしまうばそれまでであるが、バーゲン商品に翻弄されることなく安心して品定めをしたいものだとせいたくなく注文でもつけたくなる。もっとも、最近では消費者もバーゲンに慣れっこになり、少々バーゲンでは驚かなくなってしまったので、余計ザ・バーゲン、ザ・バーゲンと宣伝し、お客集めに拍車がかかっているのかもしれない。そうは言うものの、何か掘り出し物はないかとバーゲンセールの宣伝やチラシを楽しむにしている自分ではあるが。

ところで、バーゲン品であればすべて良しと言う訳

にはいかない場合もあることも事実である。安物買いの銭失い、というのがそれにあたるであろう。いずれにしても、確かな目を持ち、確かな情報を迅速的確につかむことが大切であるが、情報過多、物量豊富な世の中であって、商品選択一つを取ってみても迷わされることが多い。

日本人はエコノミックアニマルと呼ばれて久しい。主として海外から原料を輸入し、それを加工製品化して海外に輸出してかせいでいる、貿易立国日本である。技術水準が高くなった日本は、安くて良い品を大量に生産できるようになった。しかし、外国人から見ればバーゲンを超えてダンピングとも思われるような過度ななせぎのアニマル化は避けなければならないであろう。近ごろ貿易摩擦問題が表面化し、このことがニュースなどでよく報道されているが、貿易不均衡で日本が市場から締め出しをくらうようなことは是が非でも避けたいものである。何だか話が犬風呂敷で取り留めのないバーゲンばい話になってしまったが、新聞のチラシやテレビの報道を見聞きするにつけて、バーゲンセールとエコノミックアニマルとの間に何か関連性のあるものを感じ、年中行事化して日常茶飯事にでくわすバーゲンセールに対して考えさせられた次第である。

T型人間の形成

電気工学科 鈴村 信也

早いもので、母校呉高専に赴任して1年が過ぎようとしている。時折、学生達と話をするが、彼等が最も知りたがっている事は、これから自分達が進んでいこうとしている実社会についての事のようなのである。その度毎に、私自身も、メーカーに勤務していた頃を懐しく回想している。

私の勤務していた会社は、非常に教育熱心で、入社から退社に至るまで、職務別に様々な教育コースが敷かれていた。入社すると、まず、2週間程の集団教育が行われた。大学・高専卒の千人近くのfreshmanが一堂に会して、会社幹部の話を延々と拝聴する訳である。長年培われた習慣からか、あちこちから聞こえるイビキの伴奏付きで、難解な子守歌を聴いていた。この2週間の間に夫々の配属が決定され、全国30数ヶ所

の事業所へ散らばっていった。私が配属された事業所は、社員2千人、系列会社社員2千人位の規模の工場であった。こちらでも、また、1ヶ月程の新人教育があった。今度は、事業所内の幹部から、各部の部長、中堅技術者までの先輩の方々より、人生哲学、経験談、職務内容の説明等の話を聞いたり、コンピュータ言語実習、マイコン実習、英会話等々、盛り沢山のメニューで、居眠りをする余裕はなかった。これが終ると、楽しい6ヶ月間の現場実習が始まった。現場というのは、工場内の製造ラインのことである。技術者たる者、実際の現場を経験しないと良い仕事はできないという趣旨から、ある者はコンピュータの製造ラインで半田ごてを持って、ある者は製缶ラインでハンマーを持って、製品の製造に携わるのである。もともと、その製造ラインの内が一番簡単な作業しかやらせて貰えなかったのだが。この6ヶ月間、昼間は工場で単純作業、夜は寮で同期入社の者同士で飲めや歌えのドンチャン騒ぎ、といった具合で、バラ色の生活であった。そして、6ヶ月後、遂に各部に配属されて、endless death matchが始まった。



(by 5 E 篠原 慎二)

私が配属されたのは、制御用コンピュータの設計部門で、いきなり、新製品の開発プロジェクトに放り込まれた。当時の私のコンピュータに関する知識と言えば、ハードウェアでは電子回路、ソフトウェアではFORTRAN言語位のものでしかなかったもので、まるで異次元の世界に入り込んでしまったような感があった。つまり、周囲の人間が使っている専門用語がさっぱりわからなかったのである。配属されてからの教育は、一転して、OJT (On-the-Job Training) が中心であった。ち、実際の業務がトレーニングそのもの

となり、中堅技術者となるまで仕事を消化することによって鍛えられていくのである。また同時に並行して、高度な専門分野とか英会話に関しては、徹底した研修があり、実習時代とは比較にならない程、その内容も厳しいものであった。

会社におけるこのような社内教育の基本的路線は、「T型人間の形成」にあるようである。この言葉は、会社幹部、事業所幹部、そして上司の口からついて出て来た言葉でもあった。T字の横一字は、浅く幅広い知識と教養を指し、T字の縦I文字は、各人の専門分野における深い技術力を指す。即ち、浅く幅広い知識教養と深い技術力の双方を兼ね備えた技術者に育てようという趣旨である。会社幹部や事業所幹部から聞いていた頃には、「ふむふむ、いい言葉だ」とか思っていた自分であったのだが、配属されて上司から聞く頃になると、自分の専門分野だけで精一杯で、それ以外の分野にまで目を向ける余裕など無くなっていた。しかし、自分の技術力がつくにつれ、仕事内容もだんだんと高度になっていき、必然的にこの言葉を再認識するようになっていった。

会社というのは利益の追求が最大の目的であり、金もうけをしなければならない。従って、売れる製品を作らなければならない。売れる製品を作る為には、実際に製品が使われる分野で、今どのような必要性が生じているのかを的確に分析し、それに見合った製品の開発をする必要がある。例えば、制御用コンピュータを製品と見るなら、鉄鋼、水力、火力、原子力、化学、水等々の様々なアプリケーション分野における使われ方を分析し、要求されている処理性能、コンピュータシステムの規模等を見極め、それに基づいて製品開発を進めていくという具合である。この分析をする為に、様々なアプリケーション分野に関する知識が必要となってくるのである。つまり、自分の専門分野の知識だけではその知識を生かすことはできない。自分の専門分野の知識を十分に生かす為には、他の様々な分野の知識が必要となってくるということなのである。

考えれば考える程、このT字の意味は深く、広義にも狭義にも解せられる。また、技術者にとっての意味だけでなく、すべての職業に通じるとも思える。偉そうな事ばかり書いてしまったが、かくいう私も、まだまだ小さくそして不恰好な形をしたT字しか描けない人間である。

新着図書案内

(昭和60年8月～昭和61年1月受け入れ図書室備付分)

> 0 総 記 <

- | | |
|--|------|
| 岩波講座 情報科学 | 岩波書店 |
| 2: 電子計算機への手引 (森口繁一等) | |
| 4: 情報と符号の理論 (宮川 洋等) | |
| 11: データ管理算法 (渋谷政昭等) | |
| 19: 最適化 (西川禎一等) | |
| 情報通信の新時代 (増田 祐司) 有斐閣 | |
| 論理設計入門 (相原恒博等) 日新出版 | |
| エキスパート・システム (F.H.ロス) 産業図書 | |
| データベース構築の理論と実際 (原田 勝等) コロナ社 | |
| コンピュータ英和辞典 (井口 厚) 学習研究社 | |
| 一種情報処理受験シリーズ オーム社 | |
| 1: コンピュータアーキテクチャ (朴 容震) | |
| 2: COMP-Xプログラミング (甘利 直幸) | |
| 3: プログラムの設計・作成 (廣松 恒彦) | |
| 4: システムとプログラム設計 (西村真一郎等) | |
| 5: オンラインシステム (甘利 直幸) | |
| 6: 経営科学とOR (廣松 恒彦) | |
| 情報処理技術者試験基本用語集 (岩田壽夫等) 啓学出版 | |
| システム工学の手法 (成田誠之助) コロナ社 | |
| 新しいソフトウェア開発技術 (大野豊等編) 〃 | |
| Cツールライブラリ 技術評論社 | |
| 問題解決とプログラミング (S.H.ネルソン等) 近代科学社 | |
| 現代システムプログラムの基礎 (萩原 宏等) オーム社 | |
| ソフト工学レクチャーノート (市川 忠男) 日刊工業新聞社 | |
| 実践UNIX入門 共立出版 | |
| 初めて学ぶ人のためのコンピュータ概論 (川端 親雄) オーム社 | |
| Pascalプログラミング (水上孝一等) 朝倉書店 | |
| FORTRAN77プログラミング (水上孝一等) 朝倉書店 | |
| パソコンとPascalによるプログラミング入門 (根本佐久良雄等) オーム社 | |

Z-80機械によるプログラムと制御
 (中山 章) オーム社
 やさしいマイコンゲーム (奥沢 清吉) 日本放送出版協会
 パソコン・グラフィックス入門
 (大江 修造) 日刊工業出版社
 アルゴリズムの作り方 (澤田 晃) 共立出版
 B A S I C 逆引き事典 (高橋三雄編)
 マグロウヒルブック
 大学教養コンピュータ図学 (芳田 剛等) コロナ社
 研究調査 参考文献総覧
 (波多野賢一等編) 文化図書
 日本大百科全書 5-6 小学館
 フランス百科全書絵引 平凡社
 人生と(上手に)つきあう法
 (A・ルーニー) 晶文社
 岩波グラフィックス 岩波書店
 32: 京の四季 (林屋辰三郎)
 33: 西洋館再見 (増田 彰久)
 岩波セミナーブックス ♪
 13: ヨーロッパ中世の社会史
 (増田 四郎)
 14: 現代経済学の群像 (都留 重人)
 15: ワルラス経済学入門 (根岸 隆)
 16: 芭蕉の連句を読む (中村 俊定)

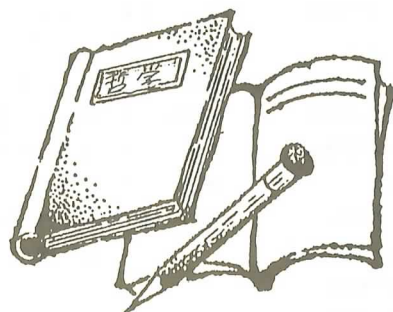
> 1 哲 学 <

新・岩波講座 哲学 ♪
 2: 経験 言語 認識 (黒田 亘等)
 4: 世界と意味 (山田 晶等)
 10: 行為 他我 自由 (藤沢 令夫等)
 14: 哲学の原型と発展 (斎藤忍随等)
 15: 哲学の展開 (大鹿一正等)
 ヒューマニズム考 (渡辺 一夫) 講談社
 中国の人と思想 集英社
 1: 孔子 (加地 伸行)
 2: 孟子 (鈴木 修次)
 3: 孫子 (立間 祥介)
 4: 老子 (楠山 春樹)
 5: 荘子 (中嶋 隆蔵)
 6: 司馬遷 (林田慎之助)
 7: 王安石 (三浦 國雄)
 8: 朱子 (佐藤 仁)
 9: 王陽明 (山下 龍二)
 10: 李卓吾 (溝口 雄三)
 11: 康有為 (坂出 祥伸)
 12: 魯迅 (丸尾 常喜)
 孟子 (貝塚 茂樹) 講談社

キェルケゴール (橋本 淳) 人文書院
 ゲーテル・エッシャー・パッサ
 (D.R.ホフスタッター) 白揚社
 現代人の愛と孤独 (J.J.リンチ) 北大路書房
 自己をさぐる (東 清和) 千曲秀版社
 職場で役だつカウセリング (江川 玟成) ♪
 創造力の伸ばし方 (中山 正和) P H P 研究所
 トップの条件 (扇谷 正造) ♪
 高僧伝 集英社
 2: 聖徳太子 (花山 勝友)
 8: 道元 (松原 泰道)
 全集 日本の古寺 ♪
 17: 山陰・山陽の古寺 (大橋俊雄等)
 禅僧の逸話 (西部 文浄) 淡交社

> 2 歴 史 <

世界現代史 山川出版社
 37: 世界現代史 (柴田三千雄等)
 国史大辞典 第6巻 吉川弘文館
 史料日本近現代史 三省堂
 1: 近代日本の形成
 2: 大日本帝国の軌跡
 3: 戦後日本の道程
 呉 あき書房
 いまアジアを考える I-Ⅱ (小島晋治等) 三省堂
 ローマ帝国衰亡史 第4巻 (E.ギボン) 筑摩書房
 本田宗一郎 男の幸福論 (梶原 一明) P H P 研究所
 地図学用語辞典 技報堂出版
 角川日本地名大辞典 角川書店
 2: 青森県
 37: 香川県



> 3 社会科学 <

社会学的想像力 (C.R.ミルズ) 紀伊國屋書店
 岩波ブックレット 岩波書店
 47: しっかり母さんとぐうたら息子の人生論
 48: 教育基本法をどう読むか
 49: 手づくりの教育
 国際化時代と日本人 (栗本 一男) 日本放送出版協会
 ソウル原体験 (黒田 勝弘) 亜紀書房
 現代のドイツ 三修社
 12: ドイツと世界 (P. ブリアン等)
 子どもたちに何を伝えるか 朝日新聞社
 いま日本人であること (宮田 光雄) 岩波書店
 21世紀は警告する 日本放送出版協会
 1: 祖国喪失
 2: 飢えか戦争か
 3: 石油文明の落日
 4: 小さな家族の大きな崩壊
 5: 兵器の反乱
 6: 「悪魔の二者択一」を超えて
 柔らかい個人主義の誕生 (山崎 正和) 中央公論社
 入門新書〈時事問題解説〉シリーズ 教育社
 402: 世界の食糧情勢 (田辺 義雅)
 403: 南北問題入門 (白沢 照雄)
 405: ゴルバチョフとクレムリン (木村 晃三)
 410: アメリカ海軍の全貌 (田岡 俊次)
 411: 第五世代コンピュータ (那野 比古)
 419: アフリカ難民問題 (洛山 洋一)
 422: 北方領土 (酒井 良一)
 424: S D I 戦略防衛構想 (西村 繁樹)
 439: ハイテク企業最前線 (野中 博史)
 現代法学全集 筑摩書房
 48: 英米法 (伊藤正己等)
 判例による法学入門 (中川善之助等編) 青林書院
 イスラーム法の世界 (真田 芳憲) 中央大学出版部
 ミルとマルクス (杉原 四郎) ミネルヴァ書房
 あいまいだからおもしろい (遠田 雄志) 有斐閣
 パソコンによるOR (牧野都治等) 朝倉書店
 現代ビジネス人材論 (日下 公人) P H P 研究所
 交渉力の時代 (藤田 忠) 〃
 無気力からの脱出 (水口 禮治) 福村出版
 講座 現代・女の一生 岩波書店
 3: 恋愛・結婚
 6: 仕事・職場
 千年檜の下に (扇谷 正造) あいうえお館
 自立のすすめ (石井完一郎) 弘文堂

住まいの家族学 (外山 知徳) 丸善
 民族民芸双書 岩崎美術社
 96: 狩猟の民俗 (佐久間惇一)
 97: 紙の民具 (廣瀬 正雄)
 98: 疫神とその周辺 (大島 建彦)
 99: 祭礼と風流 (西角井正大)
 100: 民家と風土 (小林 昌人)
 日本人 ミサワホーム総合研究所
 ことわざの文化人類学 (松野 道男) 研究社出版

> 4 自然科学 <

科学論序説 (H. I. ブラウン) 培風館
 科学的発見の現象学 (A. プラニガン) 紀伊國屋書店
 英文で読む大科学者のことば 講談社
 図説科学・技術の歴史 上・下 (平田 寛) 朝倉書店
 遠山啓のコペルニクスからニュートンまで (遠山 啓) 太郎次郎社
 ホロン革命 (A. ケストラ) 工作社
 数学思考おもしろ読本 (渡辺 茂) 第一企画出版
 数学入門シリーズ 岩波書店
 7: 幾何のおもしろさ (小平 邦彦)
 行列とベクトル 理工図書
 最適化法 (近藤 次郎) コロナ社
 最近の数値計算技術 アイテス
 超相対性理論入門 (清家 新一) 大陸書房
 オックスフォード物理学シリーズ 丸善
 16: 半導体素子の物理 (D. A. Fraser)
 時間の物理学 (P. C. W. デイビス) 培風館
 天文観測年表'86 地人書館
 応用光学1-2 (鈴木達朗等) 朝倉書店
 電磁気学 (浜田 博等) 〃
 分子の世界 化学同人



化学 One Point 共立出版
 8: 燃料電池 (高橋 武彦)
 11: 膜のはたらき (仲川 勤)
 13: マイクロカプセル (近藤 保)
 14: 化学反応式 (松永 義夫)
 15: 色素の化学 (西 久夫)
 16: 化学センサ (清山 哲郎)
 消えた地球重力 (清家 新一) 大陸書房
 空飛ぶ円盤完成近し () 〃
 朝日コスモス'86 朝日新聞社
 宇宙の四次元世界 (清家 新一) 大陸書房
 ハレー彗星がやってくる (N. コールダー) 岩波書店
 洪水 西武タイム
 地震 〃
 火山 〃
 野草検索図鑑 学習研究社
 1: 寄生・水生・海岸の野草
 2: 双子葉の野草1
 3: 〃 2
 4: 〃 3
 5: 単子葉の野草1
 6: 〃 2
 7: 樹木
 8: シダ
 脳と創造性の謎 (品川 嘉也) 大和書房
 脳からみた心 (山鳥 重) 日本放送出版協会
 ブルーボックス 192冊 講談社

> 5 工 学 <

システム工学講座 コロナ社
 12: 交通システム工学2 (海老原浩一等)
 伝熱研究における温度測定法 (棚澤一郎等) 養賢堂
 技術資料 流体計測法 日本機械学会
 計測のためのエレクトロニクス技術 コロナ社
 機械計測のためのセンサと信号処理 日刊工業新聞社
 工業計測便覧 コロナ社
 ライフサイエンスを測る (丹羽 登編) オーム社
 応用力学演習問題解析法 (西村 敏雄) 理工図書
 有限要素法 コロナ社
 新しい構造材料 〃
 材料科学 (C.R. バレット) 培風館
 1: 材料の微視的構造
 2: 材料の強度特性
 3: 材料の電子物性

マイコン利用技術 コロナ社
 エネルギー変換工学 (西川兼康等編) 理工学社
 技術のこころ 丸善
 1: 機械技術史をさぐる
 2: 二十一世紀へむけて
 先端技術動向/バイオ・材料・センサ 日刊工業新聞社
 科学万博から何を学ぶか (飛岡 健) 日本能率協会
 科学技術を考える 晶文社
 これだけは知っておきたい土工事の基礎知識 (阿部 裕編) 鹿島出版会
 技術士第二次試験の解答例 近代図書
 測量士補試験問題集 (山本 富久) 理工図書
 B A S I Cによる土木工学演習 (宇津木愛正等) 森北出版
 新体系土木工学 技報堂出版
 20: 岩盤力学 (川本桃万等)
 建設工事における地質工学 (高橋彦治等) 鹿島出版会
 土木繊維 (P.R. ランキラー) 森北出版
 水辺の計画と設計 (吉村元男等) 鹿島出版会
 水理公式集 昭和60年版 土木学会
 これだけは知っておきたい水害対策100のポイント (水谷 武司) 鹿島出版会
 絵でみる下水道の計画・設計 (斎藤健次郎等) 山海堂
 環境科学大辞典 東京化学同人
 建築卒論レポートの書き方 (山口 廣等) 井上書院
 建築セミナー 理工図書
 S D選書 鹿島出版会
 194: トーネット曲木家具 (K. マンク)
 195: 劇場の構図 (清水 裕之)
 196: オーギュスト・ベレ (吉田 鋼市)
 197: アントニオ・ガウディ (鳥居 徳敏)
 198: インテリアデザインとは何か (三輪 正弘)
 たったこれだけで自由自在建設マンの英会話



- 芸術としての建築 (渡辺 豊和) 晶文社
 建築構造力学1-2 (日口 武一) 昭晃堂
 井上建築材料辞典 井上書院
 これだけは知っておきたい建築用セラミックタイルの知識 (柴辻政洋等) 鹿島出版会
 土と建築基礎の問答 (鈴木 三郎) 建築知識
 鉄筋コンクリート造入門 (岡田勝行等) 彰国社
 DA建築図集 医病院 〃
 1: 私立の診療所
 2: 私立の病院
 住宅のデザイン300集 (服部扶桑等) オーム社
 積木の家 (相田 武文) 丸善
 GA Houses 世界の住宅18 A.D.A.Edita Tokyo
 磯崎新のディテール 彰国社
 人間のための住宅のディテール (宮脇 檀) 丸善
 住の神話 (吉田 桂二) 鳳山社
 ハンディキャップ者配慮の住宅計画 彰国社
 木造住宅の設計法 (大庭 孝雄) 学芸出版社
 衛生設備のトラブル50 〃
 絵とき建築環境工学 (今井 与蔵) オーム社
 電気工事施工図の見方・書き方 (黒木信典等) 〃
 機械工学便覧 日本機械学会
 基礎編A4: 材料力学
 応用編B1: 機械要素設計トライボロジ
 〃 B2: 加工学・加工機器
 〃 B4: 材料学・工業材料
 機械工学大系 コロナ社
 39: 生産設計 (須永 照雄)
 機械力学 (竹内洋一郎等) 朝倉書店
 〃 (沖島 喜八) 槇書店
 材料力学公式集 (湯淺 龜一) コロナ社
 振動工学 (前澤成一郎) 森北出版
 振動工学ハンドブック 養賢堂
 機構学 (安田 仁彦) コロナ社
 機械制御のためのセンサ技術入門 (増田 良介) 近代図書
 次世代CAD/CAM (川辺 真嗣) 工業調査会
 機械・電気系の基礎製図 明現社
 JIS機械製図法 (大久保正夫等) 朝倉書店
 大学講義 機械設計 (吉本 勇) 丸善
 最新の生産加工技術 コロナ社
 伝熱計算法 (千輝 淳二) 工学図書
 工学基礎 流体の力学 (安藤 常世) 培風館
 空飛ぶ円盤製作法 (清家 新一) 大陸書房
 円盤機開始せり (〃) 〃
 実験円盤浮上せり (〃) 〃
 UFOと新エネルギー (清家 新一) 大陸書房
 フライトコントロール (金井喜美雄) 槇書店
 電気の歴史 (直川 一也) 東京電機大学出版局
 電気・電子工学大系 コロナ社
 8: システム基礎 (中西義郎等)
 初歩から一技までの電気回路 (春山 定雄) 〃
 図解VAN入門 オーム社
 レーザと光ファイバ通信 (野田 健一) 共立出版
 光ファイバの実験と工作 (大久保 忠) 日本放送出版協会
 ロボット工学とその応用 電子通信学会
 電子計算機2 (金田 弘) コロナ社
 画像認識論 (長尾 真) 〃
 日本のコンピュータの歴史 オーム社
 VAXアーキテクチャ・ハンドブック 共立出版
 液晶ディスプレイ 昭晃堂
 ロボット工学応用技術 (中野栄二等) 養賢堂
 ロボット・マニピュレータ (R.P.ポール) コロナ社
 ロボット社会と人間 (斎藤正彦編) 東京大学出版会
 ロボット ラボネートインフォメーションセンター
 ロボットの機構と制御 (花房秀郎編) コロナ社
 自動制御 (佐藤達男等) 学献社
 機械技術者のエレクトロニクス100講 (杉田 稔) 日刊工業新聞社
 エレクトロニクス重要用語集 工業調査会
 だれにもわかるデジタル回路 (天野英晴等) オーム社
 計測のための電子回路 (A.J.ディフェンダファ) 現代工学社
 上巻: アナログ回路編
 下巻: デジタル回路編
 電子論理回路の基礎 (J.R.ギブソン) 啓学出版
 メカトロニクス入門 昭晃堂



デジタル回路の基礎 (斎藤正男等) 東海大学出版会
走査電子顕微鏡 (C.W.Oatley) コロナ社
超LSIエレクトロニクス 現代工学社
1-2: 基礎編1-2
3-4: 製造技術編1-2
5-6: 応用編1-2
7: 政策編

マイクロエレクトロニクス入門 (楠 菊信等) オーム社
スイッチトキャパシタ回路(式部 幹編) 現代工学社
マイコンの話 (J. シェリー) 東京図書
エレクトロニクスデバイス活用技術 工業調査会
電子デバイス入門 (飯田 昌盛) 東海大学出版会
基礎半導体工学 (國岡昭夫等) 朝倉書店
半導体デバイスの基礎 (岸野 正剛) オーム社
超LSI時代の半導体技術100集

(庄野 克房) 〃
光通信システムのための光デバイス技術入門 (内田長志等) 技術評論社
オプトエレクトロニクス一問一答 (権田俊一等) オーム社
オプトエレクトロニクスの基礎

(水野 博之) 日刊工業新聞社
光技術の応用 (吉田 進) 産業図書
鉄の文化史 東洋経済新報社
溶融加工 (田村 博) 森北出版
精密鑄造法 日刊工業新聞社
溶接工学 (荒田吉明編) 朝倉書店
電気集塵装置 (松本 俊次) 日刊工業新聞社
ファインセラミックス新素材 〃
ニューセラミックスの世界 (境野 照雄) 岩波書店
火は語る (疋田 強) 青土社

> 6 産 業 <

国土計画概論 (八十島義之助等) 技報堂出版
産業新地図 朝日新聞社
図説 万国博覧会史 (吉田光邦編) 思文閣出版
地球を襲う飢饉 (W.A.ダンドー) 大明堂
緑と文明の構図 (筒井 迪夫) 東京大学出版会
広告コミュニケーション (G. ダイヤー) 紀伊國屋書店
都市交通のはなし1-2 (天野光三編) 技報堂出版
新交通システム (井口雅一等) 朝倉書店

> 7 芸 術 <

ルドルフ・シュタイナー (上松 佑二) PARCO 出版局
岩波美術館 歴史館第7室 岩波書店

国宝1-15 毎日新聞社
名画とは何か (K. クラーク) 白水社
水彩画の写実技法 (R.D.レイナ) 美術出版社
写真による絵画技法 (U. カイザー) 〃
筆でデッサンする (安徳 瑛) 〃
ペン画の彩色技法 (H. ボーグマン) 〃
中國書道史 (神田喜一郎) 岩波書店
リトグラフ (吉原 英雄) 美術出版社
土門拳全集 小学館

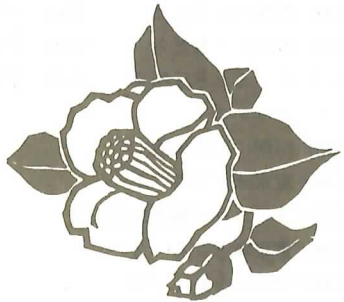
6. 文楽 10: ヒロシマ
神々の原風景 学習研究社
聖地ひとり歩き (善養寺康之) 講談社
マンハッタン・ドリーミン (MALTA) 角川書店
スポーツとはなにか (P. ワイス) 不味堂出版

> 8 語 学 <

現代実用外来語辞典 ぎょうせい
自己表現の技術 (稲垣 吉彦) PHP 研究所
「応用自在」説得の技術 (川勝 久) 〃

> 9 文 学 <

古事記の成立と構想 (尾畑喜一郎) 桜楓社
デンマーク日記 (高橋 展子) 東京書籍
宝石の声なる人に (大岡信編訳) 平凡社
記憶の闇 (松下 竜一) 河出書房新社
完訳日本の古典 小学館
5: 万葉集
11: 蜻蛉日記
18: 源氏物語5
48: 狂言集
55: 芭蕉文集 去来抄



漢文名作選
 1: 思想 (江連 隆等)
 2: 歴史 (大竹修一等)
 3: 漢詩 (田部井文雄等)
 4: 文章 (巨勢 進等)
 5: 日本漢文 (菅野礼行等)

大修館書店

692: 心臓の病気
 693: 京のお番菜
 694: 健康相談 5
 695: 女性にすすめる温泉

中国古典詩聚花

1: 政治と戦乱 (横山伊勢雄)
 2: 隠逸と田園 (石川 忠久)
 3: 詠史と詠物 (市川桃子等)
 4: 思索と詠懐 (大上 正美)
 5: 山水と風月 (向島 成美)
 6: 歳時と風俗 (中島敏夫等)
 7: 美酒と宴遊 (山之内正彦等)
 8: 友情と別離 (高島俊男等)
 9: 行旅と辺塞 (佐藤 保)
 10: 女性と恋愛 (野口 一雄)
 11: 中国古典詩総説 (前野 直彬)

小学館

新潮文庫

新潮社

(1984年新潮文庫の世界文学(アメリカ)のうち品切を除くすべて)

モモ (M. エンデ) 岩波書店

岩波新書

307: 経済データの読み方 (鈴木 正俊)
 308: ヒバクシャ・イン・USA (春石 幹男)
 309: 香港 (岡田 晃)
 310: 戦中用語集 (三國 一郎)
 311: 異邦人は君ヶ代丸に乗って (金 賛丁)
 312: フットボールの社会史 (F. P. マグーン, Jr)
 313: 江戸名物評判記案内 (中野川 敏)
 314: 核の冬 (M. R. ロビンソン)
 315: インド国民軍 (丸山 静雄)
 316: 昭和青春読書私史 (安田 武)
 317: 高杉晋作と奇兵隊 (田中 彰)
 318: 女性画家列伝 (若桑みどり)

岩波ジュニア新書

99: 論理的に考えること (山下 正男)
 100: 青春とはなにか (真継 伸彦)
 101: 数学はともだち (柴岡 泰光)
 102: ピラミッドは語る (吉村 作治)

カラーブックス

685: 川柳にみる大阪
 686: 東京味どころ 1
 687: ヨーロッパ鉄道旅行 3
 688: 東京味どころ 2
 689: ブルートレイン'85
 690: 健康食百科 7
 691: 良寛さま

保育社

寄贈図書

書名	寄贈者
科学の歴史	日本IBM
戦後石油産業史	石油連盟
中央大学創立100周年記念論文集	中央大学
福井工業高等専門学校二十年史	福井工業高等専門学校
物語・建設省戦後営繕史の群像(上)	建設省

編集後記

第14号をお届けします。学生の皆さんから13編、先生方から3編の読書感想文、随想を掲載しました。また、本号から新企画として「利用案内シリーズ」をスタートし、図書に関する興味深い記事を連載していく予定であります。

なお、本号の発行が年度と年度の境目となっているために、学生の皆さんの学年表記が60年度のものとなっていることをお断わりします。今後の図書だよりの充実を図るため、皆さんの意見や原稿をお待ちしています。

(川尻、鈴木)